山陵ノ發掘及崩壞

ル 3
3004

12 3
3004

4-6-5
仲
474

山陵之發掘及崩壞

去水五味均平藏

ル 3
3004

宮内省圖書寮

狭城盾列池後陵

（扶桑畧記 二十九 後冷泉）康平六年五月十三日發遣山陵使是依去三月盜人掘池後○成務山陵掠奪寶物也　九月廿六日被定山陵寶物等如旧可返納之状紀傳明経等諸道勘文并犯人罪名被勘法家　十月十七日興福寺僧静範坐山陵事配流伊豆國縁坐者十六人僧俗共配流安房常陸佐渡隱岐土佐等國此日立興福寺使参議左大辨藤原経家卿少納言源師賢等為遠流寺家僧被告其由也

（百涙抄四 後冷泉）康平六年九月廿六日諸卿定申諸道勘申山陵寶物等可返置議法　十二月十五日盾列山陵○成務　修覆并返納盜人所取出之寶物

宮内省

（章武朝臣記）嘉永五年四月十三日傳奏三條家ヨリ招
ニ應ジ為名代章甫出頭之處直接御尋之筋ニ
付可相成者後刻ニテモ直参候様被命依之申刻
出頭大納言實萬卿面會迫来風説有之候南都
ニテ撥山陵候犯人一條ニ付内々武邉ヨリ役邉ヲ以
テ打合之儀有之ニ内々殿下政通公ニ及言上之
處官外記之外ニ東坊城聰長卿并章武等学者
之邉ヲ以テ勘例并所存等可勘進旨被命候間
篤ト勘考不日可申上旨被命左之書附被渡
於奈良奉行所召捕候盗人成務天皇陵内
ヲ取出候物并一旦堀穿跡取計方等之事
但堀穿候所如元埋置有之趣之事
（奈良奉行調書）嘉永五年十二月和州添下郡横

領村百姓嘉兵衛外四人
成務天皇御陵堀穿曲玉朱管石等盗取扶犯
罪ヲ以テ磔ニ處セラル左同人判決前死亡ニ付鹽
詰ニテ奈良町引廻シ候ナリ

狭城盾列池後陵

（大和國名所圖會）大和巡覽記曰石塚といふを近年本多内記正勝郡山を領し給ひし比里人石塚なて石を掘取とて石棺を堀あらはす棺を開て見れハ大刀短刀鏡などありこゝをおいて領主に訴ふ本多氏天子の陵なることを知あひもとの如く土をもて封をし命をうる初て石棺をひらきたる者いふ

檜隈大内陵

（百錬抄十四四條）嘉禎元年四月八日庚午或人云去月廿日以大和國高市郡天武天皇御陵為群盜被穿鑿搜取重寶云云多是金銀之類云云　二年四月十五日辛丑為實撿天武天皇御陵被遣勅使參議左大辨為泛諸陵頭惟宗盛能率寮下部參内称康平之例不及穢氣沙汰欤　暦仁元年二月七日癸未中大夫判官友景相具犯人（天武山陵盜人也）參大理門前見物之車塞路壯觀也

（帝王編年記二十四四條）嘉禎元年四月十一日大和國高市山陵去比為盜人被穿破近邊南都并京中諸人多入陵中奉拜御骨等天武天皇山陵也

（實躬卿記）正應六年四月十二日抑波卿（後定）○相語曰

先日官人章文於河東邉行廣法師ヲ召取其故
者天武天皇堀御廟取彼御頭臨下取之由風聞仍
召取云云件御頭汭櫃持之取之奉置法勝寺阿
弥陀堂云云此事實彼御頭欲彼實否未決件等
事佞定可申沙汰之由先日関白被仰凡無才学事
也嘉禎堀彼御廟有盗人官人召取之渡大路自
彼手傳取又所相傳也白状云云此事為頼藤勅使
被問諸人云云先阿弥陀堂之御不穏便實否落居
以前奉堀彌宜□佛由人々申之由所相語云云件頭
大過普通之由章文申入云云

三島藍野陵

(公衡公記)弘安十一年二月廿五日官人章貞未召取山
陵犯人(遥拝天皇摂津國島上陵)勸賞事申入云云付長官申入自内
内又可存知之由示之賦物(御鏡以下)持来之然而明後日伊
勢幣家君御神事也仍不取入返給仰聞食之由
畢

諸陵要記云御在所発けて石槨の大石四個たかりあらはれ
り又陵山より周囲の堤より列祢埴めくる土壷ゝとおほく
露出て廣大なる古陵なりと云ゝ

磯長山田陵

（扶桑畧記 二十九 後冷泉）康平三年六月二日河内國司言上盜人掘推古天皇山陵之由上

後田邑陵

（中右記）長治三年（嘉承元年）二月十九日小松山陵（孝光）使可被立日時使右大将被定申（廿八日）是仁和寺法親王去年被造房舎之間西築垣入山陵四至内頗被堀破了其後彼山陵頻鳴云云又入滅近日公家王体不豫之間祖廟為祟之由見御卜遣右衛門権佐實光實撿之處事已實也為被申件事可被立山陵使云云予入其使次官保隆者　廿八日午時参内是為勤仕小松山陵使所参入也予給告文出従陽明門行向後田邑山陵（小松陵也）先二拝讀告文又二拝了令焼帯物爰仁和寺別當権大僧都覚意来是依天氣此次聊被破件山陵遣事依有可廻見之由仰也雖然已臨夜陰不知東西空居緑樹之下只

尋破損之趣許也覚意僧都申云故覚行法親王
被作北院僧房之時山陵與彼房面築垣相摂之
間下人頗犯其土人々見付ニ制止了但如延喜式
者件山陵四至又不分明也仍前日遣右衛門権佐
實光令實撿之處四至不分明由注申了者以此
旨可奏聞者今日告文之趣雖有破損之疑未有
一定由仍且被謝申也及深更帰來且奏此旨了○中略

實撿後田邑并村上二陵破損事

後田邑陵○孝光

新堀損陵東邊三箇所

一所南北十五丈五尺 廣所一丈八尺 深所八尺餘 狹所八尺餘 浅所三四尺許

一所南北八丈五尺 廣所一丈三尺 深所六尺 狹所七八尺許 浅所三四尺許

一所南北二丈二尺 廣所一丈 深所五尺 狹所六尺許 浅所二尺

一喜多院且寅築垣外北小路 東西十五丈五尺 廣一丈二尺

但四至不分明之由寺家所申也

邑上陵○村上

加實撿之處全無破損四至不分明之由寺家同所
申也

右依宣旨實撿如件

長治三年二月十三日　　諸陵寮官人代山本吉

使右衛門権佐藤原朝臣実光

件文書等下給天相尋之處彼清水寺近代全無
其跡又立屋里在廣隆寺邊之由寺僧等所申

上也仍不可有一定事歟但喜多院造作之間
小松山陵時々鳴動之由僧都所被語也
今案件山陵四至强不可被尋只今度被喜多院
造作之間為面築垣小松山陵之東邊為下人頗
被掘破也被修補件所者可宜歟其由見參之次
奏聞了
（百錬抄五 堀河）嘉兼元年二月廿八日發遣參議宗忠卿
於後田邑陵（孝光）謝申堀損之由去十三日令左衛門
權佐實光実檢之覚行親王修造喜多院之間誤
堀損云云任式文可修固之由宣下

佐保山南陵

（本朝世紀）久安五年十月卅日戊寅今日右少史惟宗
時重下向南都是為實檢聖武天皇山陵也去十日
東大寺所司等訴申云件山陵去七月為興福寺上
座信實被撥堀之由云云
左辨官下大和國
應遣使實檢言上東大寺所司等言上堀顔本願
聖武天皇山陵運取數多大石等事
使右少史惟宗時重　從伍人
左史生　從參人
右史生　從參人
使部貳人　從各壱人
副下東大寺解狀并山陵詮面延喜式文等

右左大臣宣奉勅掘顔彼山陵運取大石等之事為令
實撿言上差件人等宜使發遣如件者國宜兼知使
者經彼之間依例勤供給官符追下
久安五年十月卅日　大史小槻宿祢師経
右少辨平朝臣範家
十一月廿五日癸卯今日實撿山陵之使右少史時重帰
洛信實陳申云信實弟子権上座玄實為造持佛
堂奈保山石少々所引也聖武天皇山陵者在佐保山
所在此山者元正天皇山陵也所曳之石兆域之外也
者東大寺諸司申云佐保山奈保山是一所異名也難
一決子細見于問註記了

安樂壽院陵
(百練抄十四條)天福元年三月七日辛亥今夜群盜乱入鳥
羽安樂壽院法華堂(羽○鳥)搜取銀御塔并種々寶
物云云

栢原陵

（仁部記）文永十二年二月十七日戊午栢原山陵堀穿事

但年窮臘被實檢了件覆奏文今日可奏聞也 中略

實檢言上栢原山陵被堀發事

御在所嶺東西一丈三尺許南北一丈六尺餘所堀發

也以土假以塞之

右依宣旨實檢言上如件抑件山陵登十許丈壇

週八十餘丈但於陵中者不及實檢仍注在狀謹

解

文永十一年十二月廿九日　諸陵寮

頭賀茂朝臣在為

使

左大史小槻宿祢秀氏

古市高屋丘陵

（高國記）柳本高屋合戦之事

其時分河内國ノ守護ハ畠山稙長ナリ又尚慶十八歳ニテ入道シト山ト云高屋ノ城ヲトリ立テ、子息ニユヅリ紀州廣ト云所ヘ隠居シテル此高屋城昔安閑天皇ノ御廟ナリ然レバ要害ヨケレバトテ城ニ築立ラレケレドモ本城ニハ恐レテ畠山殿モ二ノ丸ニ住シケル柳本此時勢ヲ分テ二千餘人高屋城ヱ馳向ヒ其マヽ押寄責ケレバ稙長難儀シ已ニ被責落ト見ユル事度々也（中略）此城ニ一ノ不思議アリ安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用ラレシ故ニヤ大和路ノ水越ト云道ヨリ城ヱ入ル者生テ帰ル事ナシトテ水越路ヲムカシヨリ明道ニテ手向ノサタモナカリケル

（前王廟陵記上）古市高屋丘陵（即安）或曰今高屋村城山是也（明應中畠山尚慶築城）或曰近年土民發陵得古代器物等

（四大）

高野陵（狹城盾列池上陵）

（前王廟陵記上）高野陵（德）称今按御陵山西北陵者是乎往年有人發此陵奪陵中財之黨身膓苦兆覩者恐還財于本處云

本文御陵山西北陵ハ狹城盾列池上陵ナリ

（令義解九喪葬）凡先皇陵墓中兆域内謂兆亦域也不得葬埋及耕牧樵採

（律疏名例）八虐

二曰謀大逆謂謀毀山陵及宮闕謂有人獲罪於天不知犯極潛思釁憾將圖不軌遂起惡心謀毀山陵及宮闕

（律疏賊盜）凡謀及及大逆者皆斬

（政事要畧二十九）衛禁律云闌入山陵兆域門者笞五十謂周兆故為營域者越垣者杖一百陵戶不覺減二等謂專當者主帥又減一等謂親監當者故綎者各與同罪集解云附釈云三秦記云秦謂天子墳為山漢云陵亦通言山陵

（律疏賊盜）凡盜山陵内木者杖一百草者減三等謂帝皇山陵草木不合芟刈而有盜者

傍丘般石抔丘南陵

諸陵要記云大和國葛下郡下田村大字今市字的塲と云ふ地是なり云ふ芝山より上る椹木生いその本より夷子社小社ありしを其社大きく造り立てむと村人かこらひ合せてその古墳を掘りしに大石積畳ねて造れる石窟の内より錬石にて造れる石棺あり劔まゝ長き太刀くさ〳〵の金物の瓦器などもありしを石ハ破取て石垣につミ又社壇拝殿の下なとに用ひるゝ今まある石なりその劔とさ〳〵の物ハ土中に埋みて今も社壇の下の土中にありぬへきなりと(村人)かゝきき

此ノ社壇ハ前方ノ石垣ノ上ニアリシ也明治廿五年他ニ移シテ御陵修営成ル

長等山前陵

諸陵要記云近江國滋賀郡大津町字別所にあり之を字亀塚といひ古墳なり云ふ近年亀塚を中央二間深六尺許發掘しかりしに古鏡刀劍及鏃等出ゝり

明治十年決定後發掘ノ箇所ニ土ヲ覆ヒテ修営成ル

深草陵

諸陵要記云山城國紀伊郡深草村大字深草字伊達町にあり云こ土中にい御石樽の大石ありて先年畑主の堀り手にて石とも三十ばかりも運い取りて御構も崩れも猶大石ともい土中に残り埋れてありその傍西南の田を堀こるにより乾元大寶の銭いのまゝ埴壺に入こるう出こることもあり又其西を深く堀て尾につくる土を取りこりしに御淫のあとや芦根朽木なともおほく出こりとそ

田邑陵

諸陵要記云山城國葛野郡太秦村大字仲野ニあり字茶臼山といふ云ふ陵形ハ円丘ニて封土いたく崩壊して御石槨の蓋石および墜道の石も露出せり

明治三十一年土ヲ覆ヒテ奉告祭アリ

大原陵 後鳥羽

諸陵要記云山城國愛宕郡大原村字勝林院実光坊の後ゟ十三重の御石塔ありこれ御陵なり云々

史徵ゟ載セゝる松崎祐之の説ゟ近間北面河端某語曰五十年前大震此塔崩壞散在無修之者已二三十年云々後悲其日就陵夷雇諸公卿聊支修築之其三重有蓋蓋下方石也其石陷窪者出一金塔側有撒金小函内納一小石青白者二枚又側有物朽敗隨手而碎彷彿如意輪觀音像乃命漆工置漆桶内數日出而乾之初得堅固基址成如旧収之不開金塔蓋藏骨耶とゝ云ゝ

觀此等物非延應中物物然則後花園院骨塔耶といへりこれらの説いなかゝゝ非ざるべく思はるゝなり

明治廿　年頃御塔傾斜セルヲ修繕ノ為ノ上部ノ石ヲ取除ケタル
ニ三四寸計ノ観音ノ像ヲ發顕セルヲ元ノ如ク納メ置キタリ
之レ史徴ニ漆工ニ命シテ繕ハシメタリト云ヘルモノナルヘシ

金原陵

諸陵要記云山城國乙訓郡海印寺村大字金ヶ原
にあり此村の西北の山傍に高サ五尺斗めくり百廿
丈計なる古墳にてその上に大石二ツ出くりこと
明治三十二年土ノ覆ヒヲ奉造祭アリ

深草北陵

諸陵要記ニ引ク真宗院文書ニ云真宗院境内ヨリ石棺ヲ掘ル事御尋ニ付則兼及ル通書付差上ル　一真宗院山ノ石棺ヲ掘出ル事四十余年以前之儀ニ御座ル當村之庄屋善入(八カ)と申者其外年寄共時ニ物語仕ル八田屋之助左衛門と申者其所ヲ耕ル節不図八角之石棺ヲ掘當リ蓋ヲ開キ見ル八其侭致腹痛相果申ル由其後四五人寄ル而掘出ル共其者共ニ不思儀之事有之ル由石棺之内ニハ何も無之物之ヒツキタル様ニ相見え申ル由　真宗院ハ後深草院御建立之地ニテ陵ヲ有之歟と古ノ申傳ヘハ若此石棺ハ後深草院之御

陵ゟ出し御座候半欤と皆ゝ申候き　一右之石
棺堀出候所ハ佛閣西ノ方之角之由申候　一右之
石棺ハ方々へ散在仕り當寺ゟハ無之座候ゝ
元禄十一戊寅　六月十三日　深草真宗院　龍空印
御奉行所御役人衆中

亀山院天皇分骨所

諸陵要記云御旧跡なるゝと思ふゝ地ハ南禅院封疆
図ゝよるゝ東南の山下ゝありて礎石敷瓦なと現存し
ゝる小図ゝあり又其時江戸なる僧録司へ遣しゝ書
牘なとゝありとて出せるなるゝ元禄十二年十二月の状ゝ
南禅院封疆絵図申付進呈候先項池之濕抜縦横
ニ溝為堀申候処東之方山下ニ緑石敷瓦堀當り
申候緑石之所一段高相見候ニ付土除申候処二
間ニ二間半之間所々敷瓦在之小礎盤顕申候云々
ゝゝ之図十三年四月の状ゝ南禅院之儀先書申
上候通古道場之遺跡へ堀當り候故春以来
云々礎盤石壇敷瓦等堂之旧跡と相見申候則
其通絵図仕り間数等書付指下申候一東南之

方壷一箇掘出申候指渡二尺四五寸許之大壷ニ
テ御座候大半破却土泥充塞中ニ様子知不申
候ニ付泥取退見申候へハ壷之底火化之骨堇
大分収有之誰之墓所とも曾相知不申候其
近邊石塔之破石数多有之候へ共墓誌一円
相見不申候右之遺骨別ニ設一壷収置申候
隨分麁末ニ成不申候様ニ念入申候とあり或
人云一山語録ニ付しへる一山行記を按ふるに
一寧一山の墳墓のことを勅亀廟側ニ削一塔書
法両額賜之又賛其像曰宋地萬人傑云々其為人
主被崇如此門弟子分塔于玉雲と見えて後宇
多上皇勅して此亀山院御分骨の御廟の側に一
塔を造て一寧火化の骨を藏しめみへるその門

弟子等骨を分て玉雲庵に藏て其木像を安しへる
といふことまてその石塔の破石といへるハ削一塔とこそ
一塔の破石なるへく火化骨堇ハ勅に依て亀廟の側
に一塔を削て藏しめみひし一寧一山の墓所に當り
古道場の遺跡といへるハ行記にいはゆる亀廟の
遺跡にてその敷尾の中央に三尺四方に囲へる処を
亀山帝御分骨の藏らをみへる御遺跡にやあ
らんといへり今封疆囲に拠てその古道場跡の積
土を取除ミるに実に礎石敷尾にてその中央に三
尺四方に囲ミしる処囲のごとく正敷存りてその四方
なる中に自然石三ッ四ッ土中に見えりうれ或人の
云へるごとく御分骨の藏りみへる御在所にて礎石
敷尾にその御堂の遺物にそあるへき

大光明寺陵 崇光

諸陵要記 谷森種家説 安政二年五月廿五日木幡伏見ゝとゝりの古跡を尋ありきけるよ云こあさな炎長老屋敷とよつる真竹叢ありその竹林の中ゝ古塚一ツあり 此辺ハ月橋院本堂より丑寅の方ゝあくる甚く發々て大石四ツ計りあらハれいり又この東方ゝ一ツ南方ゝ一ツ零れ出いる石ありとも此塚の石なるへゝ

今ノ御塚ハ維新前修営ノ時築造セシモノ

八島陵

諸陵要記ニ大和國添上郡八嶋村字宮山ヨリアリシニ小祠ヲ他ヘ移轉セシ際社頭の中央ヨリ當リ石ヲ以テ囲ミ其うちヨリ寶珠形の石ヲ掘ル所ありこれヨ依テ御骨ヲ藏奉りしこと判然セリ

是ノ寶珠形ノ石ヲ發見シタルハ明治十九年二月ノコトナリ雖新前ヨリ假定セラレタリシヲ此時確定セルナリ

後村上陵

諸陵要記云山城國葛野郡花園村大字字多野
まあり元福王寺村專念寺ノ裏村民本郷某
ノ所有竹林の中の古陵なり是ハ先年發堀
セ〳〵処よて二三拝計の穴の内よ大石三ッ四ッ顕れ
古代の物品をも發見〳〵りとい小

明治廿五年コノ大石ヲ埋ミテ御塚ヲ築キタリ

花園東陵

新定御陵勘註云実地ニ就キ捜索スルニ過般墓石ヲ發見シタリト云フ法金剛院跡ナル畑地則東御堂ニ相當ナレハ此地ヲ以テ本陵ト決定云々

明治廿五年決定ノ當時ニ御塚ヲハ築造セシナリ

嵯峨山上陵

山陵考云嵯峨大覚寺殿の北西字御廟山の頂上にあり丘陵の形なく御表（シルシ）よハ大石中石七ツ許立たり

明治三十三年十月御表（シルシ）ノ石ニ土ヲ覆ヒ即チ御在所工事ノ故ヲ以テ奉告祭アリ　之ハ發掘セシモノト見ナシテ土ヲ覆ヒタルナラン然ルニ不封不樹土与地平使草生上と云フ　御遺詔ニヨル時ハ發掘セシモノニハ有ラサリシナルヘシ

成菩提院陵

山陵考云陵とも塔ノ壇ともよびて其形四角にて高サ四尺余り廻り百八十丈計あり　陵上の正中径り六尺計り深く窪みて西傍に楡の古木生たりとて正中の甚く窪みしる故ハ元禄十年に書る諸陵注進案に此塔壇のことを東西六間半南北七間高四尺余ノ塚ノ内に石棺有之と記しるを同十五年頃に書しる山州名跡志にハ土人号塔壇堆壇ノ地アリ此所より近年石鎖管ヲ掘出スと記しられハ元禄十年より十五年までの間に石筒を掘出しうしに依てかく窪みしるものなるへしこれ長秋記にいへる三重御塔の下壇に豫てより儲置給へり一方四尺の石筒にて崩御の後に御骨壺を藏奉

み〳〵りし御石樽ありつゝ人を甚畏くも堀出し
て何地へか零らかし欠人

菅原伏見西陵

山陵考云字古城山とよゝふその内ハ保天堂とよゝふ所
いさゝか土封残りうるその他ハ大〳〵土を平〳〵土居を築
き堀を掘なとして御陵の跡形もなく成果ゝり誰
人か居城なとしてかく無道く壊ち果けん

明治卅　年發掘ノ箇所埋立テ現今ノ如ク修営成ル

埴口陵

山陵考云天和の頃辨庄村なる八幡宮をこの陵上
る引移し神主の家を建なりとして御陵を甚く壞
ちたれハ今ハ其形いミく損ぜられと四周ハ堀の形
なと猶のこれり

身狭桃花鳥坂上陵

山陵考云御左所のうゝ円く御前のうゝ方ゝ北面ゝ
三壇ゝ築立て四周ゝ堀めくれり此堀東のうゝハ
寛永年間ゝ外堤を壊ち用水池をひろく堀りて
堀添池とよふ

押阪内陵　押阪内墓

山陵考云或人の話に此御陵五六十年前に南面の土崩れて隧道顕れしことありし時里人竊に御陵の内を伺奉りしに石室の内に御石棺ふたつありて其奥なるは横に口なるは縱に丁字の形に並ひ御座ありしやうに伺奉りしといへりと語りき

檜隈大内陵

山陵考云一堆の岡山のうへを円く築立たる御陵なり
しとハいと盛大ゑ築立たりし御陵なるへく伺ふ
たれと今ハ陵上の封土もミな壊取て御石槨の蓋
石露出ゑの奥ハ石室蓋石なとハ既く破取こるゑ
深く穴のごとく窪ミこり南面もいとく壊て羨門發
出なと甚しく荒こり

明治卅　年露出ノ箇所、埋立ラタルモイマダ形ヲナサズ（円墳）

檜隈安古岡上陵

山陵考云俗ニチョウセン山トよぶ小丘あり其丘の南面ニ前年まて冢穴ありて石室の發けしるしなりくるを追こゝ石とも取壊ち山をも半崩して山畑ニすれい今いまとの陵制分明ニ見えされと其畑の字ニ今も ツカナとよひ其畑中ニ今も取残しる石とも處こゝ残りて古墳なること疑ひなきを云こゝの石槨も毀果てもとの形勢の知られされハ今頓ニ考定奉かさきをいかるもん

明治十四年御陵決定ノ後塚ノ形ヲ作リタルナリ

田原東陵

山陵考云高二丈許周廻四十九丈許ある円丘なり
文化の頃よハ西面の欞ま羨門高五尺横四尺あらハれ
たりしと創ゆれと今ハ其處もしらすと

山科陵

前王廟陵記云又按山科陵在鏡山林麓云々何代發石棺南遷陵下石棺蓋露在野草間

諸陵要記云此御皆石の形状を古く發けさる古墳とも墓内の制度を概りつらく考ふるにこハ隧道の入口の蓋石の發まさるまて此下必石門ありて隧道の奥に石室あるへし云々

丹比高鷲原陵

古事記下云天皇深怨穀其父王之大長谷天皇欲
穀其靈故欲毀其大長谷天皇之御陵而遣人之
時其伊呂兄意富祁命奏言破壞是御陵不可遣
他人專僕自行如天皇之御心破壞以奉出爾天皇
詔然隨命宜幸行是以意富祁命自下幸而少掘
其御陵之傍還上云〻

越智嵩上陵

天平十四年五月越智嵩上陵長一十一丈廣五丈二尺崩壞諸王諸臣ヲ遣シテ修繕セシム

宮内省

宮内省